

パスカルの『パンセ』を読む会

「真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。」 小野しまと

☆ ☆ ☆

「パスカル講座『パンセ』の断章解釈」と題して、これから、西村教授の講義が始まります。教授は、京都大学、神戸商科大学、大阪外国語大学、大阪大学等で、実際にパスカルの哲学や宗教思想について講義を行ってきました。

ただ、ネット上での講義が今までのものと違うのは、話す者と聞く者との相互的な関係にあるということです。話す者が、壇上から一方的に学生に向かって講義をするというのとは違って、聞く者が次には話す者になって、教授に話しかける。教授は聞き手になって、相手の意見を聞き、それについての自分の意見を述べる。と、こういった対話形式の講義が、ネットによって初めて可能になったということです。

大学での講義でも、質問がなかったわけではありません。しかし、口頭での質疑応答は、たいいてい分かったような分からなかったような中途半端なところで終わってしまいます。

教授も、学生の質問に答えるために一緒に喫茶店へ行ったりして、延々と話し合ったことがあると言っていました。それでも、口頭での話し合いでは、厳密な論理はなかなか伝わりにくいものです。

その点、ネット上での文書による対話は、一言一句もゆるがせにはできません。すべて記録されて残るからです。その代わり、あとで修正することも可能です。あまり神経質にならずに、言いたいことを言えるというメリットもあります。

この文書による対話形式によって、厳密な論理を徹底的に追求し、対話する者同士がお互いに納得するところまで進むことができます。そういう風にして、『パンセ』に含まれる 1021 の断章を一つずつ分析し、解釈していこうというのが、この講座の狙いです。

それでは、この講座がどんなふうに進められるかを見ていくことにしましょう。

最初に、断章 35 (117) を取り上げます。

『パンセ』には色々な版がありますが、この講座で使っていくのはラフユマ版と言われているものです。断章 35 というのは、ラフユマ版の番号です。

カッコ内に入っている番号は、ブランシュヴィック版のものです。日本語訳はほとんど全てこのブランシュヴィック版の順序に従っていますので、参照したりする時には、この番号が欠かせません。

版の違いについては、必要に応じて説明が出てきます。今はただ、断章番号 35 というのは、『パ

ンセ』の断章 1021 の中では、かなり先頭に近いところに置かれている。断章番号 117 は、それよりもかなり後のほうに置かれている、といった程度の見方をするだけで充分です。

さて、さっそく本文に入っていくわけですが、この講座の慣例として、最初にパスカルのフランス語原文と、西村教授の日本語訳が示されます。

断章 35 (117)

Talon de soulier.

O que cela est bien tourné! que voilà un habile ouvrier! que ce soldat est hardi!

Voilà la source de nos inclinations et du choix des conditions.

Que celui-là boit bien, que celui-là boit peu : voilà ce qui fait les gens sobres et ivrognes, soldats, poltrons, etc.

靴の踵。

ああ、なんとうまく回るのだろう。あれはなんと腕のよい職人なんだろう。あの兵士はなんと勇敢なんだろう。

ここに我々の好みと職業選択の源がある。

あの人はよく飲む、あの人はあまり飲めない。これが人々を節制家や飲んだくれにし、兵士にし、臆病者、等々にする。

☆ ☆ ☆

フランス語の分からない人は、原文の部分の部分をさっと眺めておいてください。斜めに目を通しただけでも、英語の類推でけっこう分かる所があるでしょう。以後、内容の説明で部分的に原文を引用する時には、英語の知識があれば分かるように配慮されています。

ただ、私としましては、この際フランス語の勉強も始めることをお勧めします。卓抜した文章として定評のあるパスカルの原文を読みながら、フランス語を物にできるなんて、こんなチャンスは滅多にありません。

さて、この断章の先頭には、パスカルが表題を書き込んでいます。「靴の踵」(talon de soulier)と書かれているのがそれです。

そのあとに続く訳文を見ますと、この断章のだいたいの意味が判るでしょう。私たちの職業選択が偶然に支配されているということ、パスカルは言っています。

私たちが生まれながらに持っている才能を活かして、自分に最も相応しい職業、つまり天職を見つけ出すのが理想ですが、なかなか、そううまくは行きません。

子供の頃、ふと耳にした褒め言葉や感嘆の声に影響されて、私たちは一生の仕事を選んでしまいます。あとでシマッタと思っても、もう後戻りはできません。今から別の仕事を身につけようと思っても遅すぎる、といったことになるのが落ちです。

このようなテーマを代表する表題が「靴の踵」なんです。だから、この「靴の踵」の意味をしっかり押さえておかないと、全体の意味を見落としてしまいます。

ところが、これまでの日本語訳は全部間違っていました。ブランシュヴィックという哲学者が『パンセ』の編集をするにあたって、とんでもない注釈を付けてしまったのです。

「靴の踵」の次に、「ああ、なんとうまく回るのだろう」(O que cela est bien tourné) という文章が来ますね。cela (それは) というのは、「靴の踵」のことですから、単純に言えば、靴の踵がなんとよく回っているんだろう、という意味になります。

「靴の踵」に、ここで使われている動詞の tourner を付ければ、tourner le talon de soulier (靴の踵を回す、回転させる) という意味で、何の変哲もない、ごく単純な意味なんです。

ところが、ブランシュヴィックは、少し考えすぎてしまったのか、「轆轤 (ロクロ) カンナを回して靴の踵を削る」などという、なんとも奇妙な意味で解釈してしまいました。

こういう使い方がないわけではありませんが、これは専門用語に近い特殊な用法で、普段はあまり使うものではありません。人々が tourner le talon de soulier という言葉を聞いて、すぐにピンとくるのは、靴の踵を回すこと、つまり「くるりと一回転する」ことなのです。

ところが、日本のこれまでの翻訳者たちは、ブランシュヴィック先生のご高説に簡単に飛びついてしまいました。出る訳も出る訳もみんな右へ倣えで、「轆轤カンナ」で削られた靴の出来映えを褒める訳文ばかりです。

松浪信三郎訳 「まあ、なんてぐあいのいい靴だろう」
前田陽一訳 「おや、なんてみごとな出来ばえなんだろう」
由木康訳 「まあなんてぐあいのよい靴でしょう！」
岳野慶作訳 「ああ、これは実にぐあいがよい」
田辺保訳 「まあ、なんと恰好のよい靴ですこと」

西村訳 「ああ、なんとうまく回るのだろう」と比べてみてください。西村教授は、これはダンスの足運びのことだと解釈しています。

「靴の踵がよく回るね」と誉められた少年や少女が、その偶然の一言によって、ダンサーの職業を選んでしまう。「靴の踵」のような小さな物が、人の一生さえ決めてしまうということを、パスカルは言いたかったのだということです。

「轆轤カンナで踵を削って良い靴を作ったね」。そう言って褒められた子供が、その一言で、将来靴職人の仕事を選ぶのでしょうか。あまりそんな風にも思えないのですが、この解釈は、論理的にも矛盾しているところがあります。

このように褒められるかぎり、この子供はすでに轆轤カンナを使いこなすだけの職人なみの腕を

持っていることになります。とすると、もうとっくに靴職人への道を選んでいるのではないのでしょうか。

フランス語の *tourner le talon de soulier* とよく似た表現なのですが、英語には *turn on his heels* という言い方があります。これは日本語ではどういう意味になるのでしょうか。

そう、踵でぐるりと回ること、つまり「きびすを返す」ことです。アメリカ英語では、怒った人が「きびすを返して」立ち去ることによく使われます。

フランス語でこれに相当する言葉が、*tourner les talons* です。英語とは違って、*on* に相当する前置詞が入っていないことと、英語では *his* という所有代名詞を使うのに対して、フランス語ではふつう定冠詞の *les* を使うという習慣の違いはありますが、意味はまったく同じ「きびすを返す」ことです。

さて、上記の英語のヒールが単数になり、*turn on his heel* になったら、意味はどう変わるでしょうか。踵が単数になったわけですから、片足の踵でぐるりと回ることになりますが、英語の通常の使い方としては、単数でも複数でも、違いはあまり意識されていないように思われます。

ところが、これがダンスの足運びということになりますと、片足で半回転するのと、両足で半回転するのでは大きな違いになります。

踵が単数の場合、フランス語では *tourner le talon* となりますが、パスカルがこの語法を用いる時は、いつも踵を単数にしています。例えば、断章 129 の *talon bien tourné* (よく回る踵)。

フランス語の場合、踵を単数にすると「きびすを返す」という意味にはなりませんから、パスカルが考えていたのは、片足の踵を軸にして、ぐるりと半回転することだと解釈するのが、語の慣用から言っても、最も自然な受け取り方と言えるでしょう。

そのような動作が、褒め言葉の対象になるというのは、どんな状況でしょうか。パスカルの時代で考えられるのは、ダンスか剣術の足運びぐらいでしょう。片方の靴の踵を軸にして回転することと言えば、剣術よりもむしろダンスに相応しい動作と考えられます。

そして、パスカル自身、ダンスの足運びを良くすることについて語っている断章 (断章 137) もあるくらいですから、「靴の踵がよく回るね」という褒め言葉がダンスの足運びについて言われていると考えることには、十分な根拠があると言えます。

英語の *turn* にも「轆轤や旋盤で丸く削る」という意味がありますが、これはフランス語の *tourner* についても言いましたように、職人仲間や機械工が使う特殊な用法であって、普段はめったに使うものではありません。

「ぐるりと回る」という、ずっと自然で、すなおで、誰もがピンとくる用法があるのですから、ブランシュヴィックのように、何もわざわざ日常的な用法から外れた、特殊な意味で考える必要はなかったとも言えます。

パスカルは、「ああ、なんとなくまく回るのだろう」「あれはなんと腕のよい職人なんだろう」「あの兵士はなんと勇敢なんだろう」という三つの褒め言葉を挙げています。

ブランシュヴィックは、二番目の「腕の良い職人」(habile ouvrier) という言葉に捕らわれて、「靴の踵」を靴職人の仕事と考えてしまったのではないのでしょうか。

しかし、この三つの褒め言葉は、独立した意味で使われています。「腕の良い職人」は、必ずしも靴職人を言っているわけではありません。断章 634 を見ても判りますように、パスカルは、「石工」や「屋根職人」をむしろ典型的な職人と見えています。

結局、ブランシュヴィックの説が、日本の翻訳者たちに決定的な影響を与えてしまったと言えます。全員がその説を鵜呑みにしたため、以後「靴の踵」についての日本語訳は、同じような表現が続くことになりました。

こういう現象は、「靴の踵」の例に限られるわけではありません。どの日本語訳を見ても、同じような文章が続き、同じような間違いが繰り返されています。注の付け方でさえ、ブランシュヴィック版以来ほとんど変わっていません。変わっているのは、日本語の言い回しぐらいでしょう。

そして全員がブランシュヴィック版の断章 9 2 5 辺りで翻訳をやめています。本当は 1 0 2 1 も断章があるんですが。

哲学書の翻訳について、日本の学界は非常に甘いところがあります。全体として、あまり批判の対象にはなりません。せいぜい評価されるのは文体ぐらいのものです。内容については野放し状態です。

しかし、文学や小説の翻訳ならばいざ知らず、哲学書の翻訳は、原典に劣らぬほどの厳密さを必要とします。一語たりともゆるがせにしない論理的分析がなければ、哲学の内容そのものを日本語化することはできません。

翻訳の価値を重く見る姿勢がなければ、いつまで経っても、西洋哲学を日本文化のうちに取り入れ、同化することはできないでしょう。

次回からは、このパスカル講座を、いよいよ西村教授に直接担当してもらうこととなりますが、『パンセ』の断章解釈と同時に、従来の日本語訳の徹底的な検証を行うように依頼してあります。

この断章 35 の日本語訳については、以上のほかにも、フランス語の翻訳者としては考えられないような誤訳があるということです。その解明が今から楽しみです。(小野しまと)

[2006/09/10 biwaco]